ヒメジャノメは分類学的にはタテハチョウ科ジャノメチョウ亜科に区分される種で、この仲間にはみんな図のように羽に目玉模様があり漢字では「蛇の目」と表記される。一般に鳥類はこうした目玉模様を恐れるらしく、チョウはこの目玉模様で鳥を驚かせて身を護っているという見方がある。「蛇の目」：二重丸の中を塗りつぶした図形と定義されているが、実際にヘビの目はクリクリとした愛嬌のある目をしているかというと、とんでもない。まぶたが重くて眠たいという感じで、決してパッチリと見開いてなんかいなく、むしろ、鋭く光るタカの目ならジャノメチョウの模様といくらか似ていて、鳥が目玉模様を嫌うのは獰猛なタカの目を思わせるからだという説はどうだろうか。その場合は、タカノメチョウとなってしまう。ジャノメチョウ属には一定間隔で羽の開閉を繰り返す習性があって、閉じていた羽を急に開くと鳥の眼前に大きな”眼"が現れ、驚いた鳥は一瞬攻撃をためらい、そのすきにチョウが難を逃れるという眼状紋効果が想定できるが、目玉模様のある部分を鳥についばまれたと思われるジャノメチョウ類が野外で観察されることもあるので話はややこしくなる。急所かどうか分からないが、敵の目を攻撃して戦意を喪失させるという戦法はじゅうぶんありえる。そういう外敵に対してジャノメチョウ類は実際に目がある頭部分から遠い羽に偽装としての目玉模様を設けており、鳥が目玉だとおもってつっついた瞬間ヒョイッと飛び去れば、鳥は何が起こったのかと目を丸くするにちがいない。

さて、このヒメジャノメ。高砂市松波町のひまわり公園のアジサイの葉っぱで休んでいるのを見かけ、急ぎビデオ撮影をしたが、昆虫は 6 本脚のはずなのに脚が 4 本しかない？ 実は、タテハチョウ科に属するチョウは前脚が退化していて脚としては 4 本しか使えないのだ。前脚は味覚などの感知に利用されるといわれる。実際の観察例として、沖縄の伊豆味でイシガケチョウの♀が食樹であるイヌビワの葉っぱを前脚で頻繁に叩くしぐさ（tapping）を繰り返してから産卵するのを見たことがあり、葉っぱが産卵するのに適したものかどうかを、叩くという刺激でなんらかの識別成分を発生させて確認しているように見えた。

幼虫の食草となるイネ科のススキ、メヒシバ、エノコログサなどは近隣の草原や路傍のあちこちにあるというのに、このチョウを身近に見たのは 2008 年 6 月 11 日（松波町）と 2013 年 6 月 25 日（荒井町浜風公園）の二度だけで、山里から離れた市街地にまで飛来した経緯はミステリーである。翅の裏には縦に白い筋模様があって、目玉模様とあわせてじっくり眺めると、なかなか味のあるきれいなチョウである。奄美大島から八重山諸島にかけて全体のデザインがヒメジャノメとそっくりの色調が濃くていっそうきれいなリュウキュウヒメジャノメがいるが、静岡高校生物担当の高橋真弓先生が、奄美大島から八重山諸島にかけて生息する当時亜種とされていたヒメジャノメについて交配実験を繰り返し、生まれた幼虫が続々と死ぬとか、通常 5 回の脱皮後に蛹となるところ 4 回で蛹になるなどの差異を認めて別種かもしれないと研究を進め、リュウキュウヒメジャノメとして分離独立すべきことを明らかにされた。実に 4 年間という大変な努力の成果である。

Copyright© 2009- Soft House JUMP. All rights reserved.